

生徒たちとともにつくる単元学習の展開

—— 家政科三年生との一年間 ——

片 桐 啓 恵

はじめに

一年三クラスと三年一クラスを持ったこの年度は、主題単元のまとめとして文章表現を意図的に入れていこうと考え、年間計画をたてた。ところが、三年生の方では、途中で計画を大幅に変えることになった。なぜ年間計画を変えなければならなくなったか。生徒たちとの学習を成立させるために、どこから足場をつくり直していったか、これはその試行錯誤の報告である。

1 授業構想の起点

- ① 知識・技能を吸収・体得する磁石 \parallel 核となる自我と問題意識がなければ、いかなる基礎学力もあり得ないのではないか。
- ② 高校生は単純な反復訓練に耐え得る年齢を過ぎている。従って、単なる漢字テストや形式のみの作文指導・読書指導は意味をもたない。
- ③ 知る喜び \uparrow 驚き \uparrow 生徒の生活のありようそのものへのゆさぶり。基礎学力づくりと意識づくりを不可分のものと考え、意識づくりを年間計画の底流においた上で、読む・聞く・話す・書く場を設定する。その学習活動の中で、基礎からの言語訓練を積み上げていく。このような学習活動は、結局、個別指導に焦点が置かれることになる。
- ④ 身体性と感性の解放・開発、 \llcorner 文化としてのからだ \llcorner \llcorner 人とかかわるからだ \llcorner ができていない。私語が絶えない、人の話を聞くことができないというのは、意識の問題以前に、体と感性が閉ざされているためではないか。聞くこと・話すこと（特に、発声・声による表現）、手づくり活動を重視する。学習集団として、何かをつくりあげることの喜びを生み出す。討論が日常的に行われる学習集団づくりをする。
- ⑤ 高校生 \searrow 青年が自立して生きる力——地域文化・地域教育活動の担い手としての力をつけることを目指す。この視点を取り入れた国語教育の内容を探る。
- ⑥ 自分自身の生きてきた歴史（個体史）、自分につながる親・

家族の歴史を明らかにするとともに、教育史を学習することによって、自分自身の学びの意味をとらえ直し、生涯学習と自己教育の視点をつくる。

2 家政科三年の授業（一九八四年度）

——生徒の発想による単元学習に計画変更した過程——

(1) 三年一組の実態

一学年六クラスのうち、家政科は一クラスだけ。つまり、四五名が同じ顔ぶれで三年間過ごすことになる。うまくいけばまとまりのあるクラスになるが、なれあいと惰性の集団にもなる。どちらかというと後者の弊害の方が大きい。

高校入学時の成績は商業科より平均してやや下がるが、実際に授業を行う上では差は感じない。ただ、前述したように学校全体に勉強しなくていいという雰囲気がある上に、家政科に第二志望でまわってきた生徒もかなりいて、学習意欲は全体的に低い。しかし、進学希望者は例年家政科の方が多くのである。これは、向学心によるものではなく、嫁入りの肩書きとして「短大卒」の資格を得ようというものらしい。本校では、成績上位者は「よい会社」への就職を希望し、中程度の成績の者が推薦入学で「案に入れる大学」への進学を希望するという傾向がある。「花嫁修業に来た」という生徒たちには私は言う。「花嫁修業という言葉があるなら、なぜ、花婿修業という言葉はないの？ おかしいじゃない。結婚して家庭をつくる、ということ、男も女も同等に努力しなくちゃいけないことなのに、どうして女だけが特別の修業をしなくちゃいけないんだらうか。高

〔言語活動の面からの3年間の学習構想〕

	1 年	2 年	3 年
書	生活文 意見文	随 筆	意見文 小論文 卒業レポート 個人文集
聞・話	話 す 声で表現する	聞 く 聞き書き インタビュー 群読	自分たちで 行う授業
読	課題読み	構造図をつくりながら 読みとりの力をつける	批判読み
	グループ学習活動図 書館での調査・資料 づくりのしかた 発表のしかた		
	読 書 生 活 を つ く る 図 書 館 に つ い て 知 る		

※ その時の条件によって、この中のどの部分をとって組み合わせるかを考える。

校で学ぶということ、ほんたに深いことなんじゃない」
本的な深いことなんじゃない。もっと人間として根

このクラスを、私は二年の時から持ち上がった。二年の時は、これといった手は何も打たなかった。というより、打てなかった。授業の中で何らかの試みをする以前の状態だったのである。彼女たちは、国語の授業は眠いものだと思い込んでいた。集中力を持続させることができなかった。眠れないような話をするこゝと、生徒たちの発言を中心に討議を深めながら授業をすすめることに一年間を費した。

その結果、二年の二学期半は頃から、活発に発言する者が増え始めた。しかも、それぞれの発言が個性的で、議論の際、納得できないと、それとなく説明したり、友だちがうまく説明できないでいると、代わりに説明する者が現われたりで、「山月記」などは討論があまりにおもしろいので先に進めなくて困ったくらいだった。この盛り上がりが期末考査の点数にも反映して（学習の雰囲気の高まりを点数という形にも示すことで自分たち自身を励ませ、とハッパかけたせいもあるが）、高い平均点になった。

こうして討論のおもしろさがわかり、発言の常連が十二〜三名でき、常連とまではいかないが、発言する者がしだいに増えてきた。この変化の背景には、私が呼びかけて、毎週土曜の午後、私のアパートで民話や絵本を読むようになった語り部サークルのスタートがある。このサークルは出入り自由だが、ほぼレギュラーになっていたメンバーが教室の中でも活発に動き始めたのである。

(2) 三年生当初の単元計画と学習集団づくり

ようやく学習集団ができた状態まで三年生になった。二年め

を迎えて、この最後の一年間は、実力をつける授業にしたいと思つた。特に表現に重点をおいて、個人文集づくりと個体史を軸に単元を組もうと考えた。それに、島原という土地が抱える歴史的な問題、女性の生き方の問題などをからめて単元配列をしていこうという計画をたてた。

三年になって、学習のためのグループをつくった。これは、発言を活発にする常連とそうでない者との差が開き始めたためで、全員に発言の力をつけることが第一のねらいだった。

自ら発言し、討議を進めていく力をつけてきた者のなかから八名を選んで、放課後集まってもらい、グループをつくるねらいと、どういうグループをつくってもらいたいかを私から話した。「あなたたちには、自分がどんどん発言するという段階から次に進んで、まわりの人を励ましながら発言を引き出し、討議を活発にする進行役の力をつけてほしい」と。そこで、その八名が私の意を汲んでくれて、まず組みたい副班長を選び、その十六名で班のメンバーを話し合せて決めていった。その際、生徒たち自ら、「あの人の意見を聞いてみたい」「二年間同じクラスだったのにほとんど話したことがないから、あの人と同じグループになりたい」という具合に決めていったのである。

班長・副班長たちは、班やクラス全体の討議の流れによく気を配っていた。かなり骨も折っていたようだが、おかげで、今まで一度も自ら発言したことのない者が、班のみんなに励まされて発言するようになった。班の学習ノートに「今日のスルドイ意見」という項を設けて、その時間の主人公を皆で評価していくようにしたが、こ

の項は生徒たちにも好評のようだった。

(3) 学習集団の限界とつまずき

このようにして、このクラスは学習集団として成長したかに見えただ。事実、彼女たちの討議の力は、教室内だけではなく、生徒総会の場でも発揮された。

それでも、「自分たちの学習」という意識を生徒たちは持てなかつたのである。授業中はかなり反応しているように見えるが、それを自分の中に定着させることができない。自ら学習する姿勢ができない甘さがつまずきとなる。それが試験の成績に反映する。(もともとこのクラスは、気はいいが勉強はしないという教師間の定評があった。それに、私の作問も易しくはなかった。しかし、それにしても、彼女たちの力はずっと伸びるはずだし、試験への取り組みも真剣になれば、もっと成績という形にも現われてくるはずだと私は考えていた。教師自身も生徒自身も、学習の成果を評価し、自己分析するために、試験というものにこだわらなくてはならない時があると思う)

教師が引っぱっていく授業という感覚から抜け出せない。どうしても班長にたよってしまう。また、三年の一学期というこの時期は、生徒の間に得休の知れぬゆるみ広がる。最上級生になった解放感(運動部中心の学校なので、縦の序列による圧迫が強い)、進路選択を目前にして、先が見えてくることへのあきらめと不安の交錯などが混然となるからか。

私がたてた主題単元のテーマのつながりも、すんなり生徒たちの中に入っていないというまづきがあった。

一学期期末考査の後、私は勝負をかけることにした。「このままだったらと受け身の状態を続けるのか、それとも本気になって自主的に学習に取り組むのか。受け身を続けるのなら、私も授業をあれこれ工夫するなどというシンドイことはやめて、教科書を順序通りやっていくことにしよう。本気で中味のある学習をしたいのだったら、クラスの状態をなんとかしろ。どちらを選ぶのか」

この一学期末に生徒たちが奮起して、夏休みに予定していた島原の風土と文学のグループ研究に持っていかれば、たてなおしがきく。そうならない場合は、思いきった軌道修正も必要になると考えた。

(資料1参照)

(4) 班長拡大会議と夏休みの読書会

一学期終業式を三日後にひかえたクラスマッチの放課後、班長拡大会議を行う。(班長・副班長に集まるよう連絡したところ、それ以外の者も数名やってきて、拡大会議ということになった)以後、連日、クラスのままのなき、やる気のなさについて話し合った。生徒たちの側からは、私を含めた教師に対する疑問、批判、班討議に対する疑問、クラスの仲間への不信などが率直に出された。私もそれに対して、本音で語った。

「先生の考えていることがわからん。先生は、私たちにどこまで期待しているのですか。私たちに無理なことを要求しているんじゃないですか」

「私は、ここまでと線を引いて、みんなに期待しているわけじゃない。『期待』と『信頼』は違う。『期待』とは相手を何かの枠の中に入れて考えることじゃないか。自分の思い通りに相手に動いて

ほしいという一種のエゴイズムだよ。みんなの力がどんな方向に、どこまで伸びていくか、私にもわからないよ。ただ、今のままじゃだめだってことはハッキリしている。どこまでいけるか、卒業までの残された時間の許すかぎり、伸びていってほしい。それだけだよ」

また、生徒たちは、言った。「もう、クラスの人を信じられない。あの人たちは、結局きりぎりりのところでごんばらんもん」この言葉は、私の胸にも、生徒たちの胸にも突き刺さった。

「信じるってことは、相手が自分の言ったことを理解するかどうかとか、自分の思い通りに動くかどうかということに関係なく存在するんじゃないかな。ひたすら相手に働きかけ続けることを信じるというのではないか」そう言いながら、私は、私と職場の教師集団のことを考えていた。

結局、クラス全体にどう働きかけていくか、いよいよよとなれば、私が話をしさえすれば、ともかくも表面はまともていくことはできるが——とカマかけたところ、それはダメだと生徒が言う。それじゃあ、生徒に話し合うだけ話し合わせておいて、最後は先生の考えでしめくくる、小学校の道徳のやり方と同じだと鋭いことを言う。

こうした話し合いの中から、クラスがまとまって動いていく一歩として、計画が中断したため授業でやれなかった「沈黙」の読書会を夏休みにすることを決めて呼びかけるが、一回め（八月六日、登校日）はほとんどの者が読んでこない。二回めを行うことをその場で決定する。二回め（八月八日）、三八名参加（クラブその他の用で参加できなかった者もいる）最初はいつものメンバー以外、やは

りなかなか発言しないが、「どうしてもっと意見を言い合えるクラスになれないのか」と何人かが訴えかけ、午後まで延長して、ようやく活発な読書会になる。この時は「キチジロー」に話題が集中した。キチジローの弱さが、生徒たちにはわが事として迫ってきたようだ。最後に、やはり全員で読書会をやりたいという意見が出る。

九月一日（始業式）の午後に、もう一度、今度は「ロドリゴ」や「フレレイラ」のことなどを中心に話し合おうということになったが、九月一日は集まらず、班長・有志たちの間に失望が広がる。

二学期に入ってから、最初の授業の前に、「サクラ」を使ってクラス討議に持ち込むという案を生徒が持つてくる。これは案の定、失敗。この停滞した空気のまま、二学期の授業が始まるうとしていた。いよいよ思いきって流れを変えなければならぬと思った。

(5) 戦後教育の流れを学ぶ

実は、夏の間ずっと、私の頭の中を占めていることがあった。高校で学ぶことの意味をつかめないでいる生徒たちと何年かつきあってきて、一つの仮説が私の中に生まれていた。

彼らの今の無気力を責めたところで仕方がない。誰よりも彼ら自身が自分の無気力にイライラしている姿を私は見てきた。そのように育ってきた時代状況、その時代状況はどのように変化してきたのか、特に、学校というものはどのように変わってきたのかを生徒たちと共に学ぶことで、彼らに今の自分自身の姿を見つめさせることはできないか。無気力とは、何を言っても、何をしても変わるはずがないという無力感、その体験の重なりから生じている。しかし学校教育一つとっても、わずか四十年の間に大きく変わってきた。い

や、変えられてきた。その事実を知るとは、自分たちが置かれて
いる状況もまた、変えようがなく受け取るしかないものなのではな
く、変えていけるものだという視点につながるだろう。そこから、
どの問題点にどのように挑んでいくか、自分を動かしていく活路が
開けるのではないか。

二期期の最初の授業で、私は生徒たちに語りかけた。

「実業高校の三年生の十月からは、就職先もしだいに決まり、勉
強する目標もなくなり、授業は成り立たなくなるとよくいわれる。
しかし、三年生の十月からが本当の学習だと私は考えている。

九月は、まず、戦後の教育の流れを学習しよう。あなたたちはも
うすぐ十二年間の学校生活を終えるが、それははたして納得できる
ものだったか。満足できるものだったか。不満や後悔があるとすれ
ば、その原因は、生徒個人や教師個人の問題だけなんだろうか。そ
の背後に、もっと大きな、もっと根本的な問題はないのか、それを
考えよう。あなたたちの学習は、高校卒業で終わるのではなく、今
から始まるのだから。

その後で、残りの正味三カ月で、自分たちは何についてもっと知
りたいか、何について学習したいか、それを出し合おう。その中か
ら、学習単元を自分たちでつくろう。」

月刊「考える高校生」に連載された「戦後教育のあゆみ」をプリ
ントして配り、四時間かけて一緒に読んでいき、生徒からの質問を
受けた。

九月の最後の二時間で、まずグループで話し合せて、学習したい
テーマを全部あげてもらい、黒板に書き出した。次に、それを見て、

単元や授業の方法についてのアイデアを全員に書いてもらった。そ
の中から、要望の多いものを、使えそうなものを取り入れて、新しい
単元計画をたてた。(国語教室通信No.28参照)

(6) 個人文集づくり、クラス文集づくりを目標にした表現活動
個人文集をつくらうということは、一学期、私から提案した。

(国語教室通信No.16) 文章表現に関しては、これまで何も指導し
ていないクラスだったから、一年間の終わりに個人文集をつくるとい
う目標をおくことよって、集中的に表現指導をしようと考えてい
た。しかし、これも教師の押しつけの感をぬぐえなかった。

自分たちでテーマを出し合せて単元づくりをしようとしたとき、
「自分たちの高校生活を書き残したい」「詩集をつくりたい」「民
話・童話を読んで、自分たちでも創りたい」「劇をしたい」とい
うことが生徒の中から出てきた。これが何よりの喜びである。そし
て、それが実を結ぶような学習を組織し、手助けすることが私の役
目である。

(7) 単元(自分らしく生きる)

教材・「北の国から」倉本聡(シナリオ)

「日本語と女」寿岳章子

「源氏物語」(若紫)

学習したいテーマの中で「自分らしく生きる」というのが、最も
人気が高かった。「北の国から」は生徒が読みたいと希望したも
で、登場人物のそれぞれの生き方、考え方をせりふから読みとるこ
とで、この単元で扱えると思った。「日本語と女」は私が提案した
教材だが、一年間の学習の中で、生徒が最も衝撃を受けた教材とな

った。「源氏物語」は「日本語と女」との関わりで扱おうとしたのだが、時間不足で中途半端で終わった。

■「日本語と女」の授業

岩波新書から一部をとってテキストをつくった。

I 女らしさとは 第二章 日本語における女らしさの構造

● 一般週刊誌と女性週刊誌のグラビアの文を比較調査して、感動文(一)の多さ、連用形止め(……)の多さ、固有名詞が少なく代名詞(特に「あなた」が多い、などのデータが示されている。そこで、厳密な調査をする時間はないが、生徒に女性週刊誌を持ってこさせ、前述の特徴に相当する文を見つけさせる。それを黒板にズラリと書きならべると、普段パラパラとめくっているときは気づかなくても、女性週刊誌にひしめいている文というのは実に珍妙なものである。生徒たちと共に大笑。

● 「たたかいかことば」として、三池炭鉱の女性を作ったという「がんばろう」の歌詞がある。教室に「がんばろう」の歌のテープを流す。

II 日本語と女の暮らしとのかかわり 第一章 うたの中の女

● 週刊誌のとき同様、みんな爆笑しながら読んでのだが、自分たちが好きなうたの世界だけに、週刊誌の時以上にショックも大きかったようだ。女向け、女に関することばをこれだけ集めて見せられると、女性のイメージがいかに偏り、固定されているか、気持ちが悪くなる。

III 日本語と女の暮らしとのかかわり 第三章 ある農村婦人

ループのたたかい

● ここに登場する三人の農村婦人の生きざまは、自己変革のたかいかそのものであり、その生き方とことばとのかかわりに、生徒全員が大きな感動を受けていた。この部分は、時間の都合上、授業では詳しく扱わなかったのだが、二学期期末考査の小論文に、生徒たちが自分の生きざまを掘さぶられていることが現われていた。

■小論文「自分らしく生きる——日本語と女——」

単元のまとめとして、二学期期末考査を「自分らしく生きる」というテーマの小論文とした。下書き、構想メモ、辞書など持ち込み自由。

評価の観点として、「日本語と女」が自分なりに消化されて材料として活かされているか、自分自身の体験や自分で考えた具体例が効果的に活かされているか、自分なりの主張があるか、の三点を予め示した。

小論文は、どれも自分自身のことばでしっかりと書かれていた。そこには、自分自身の生き方と切り結ぶことのできたことばが持つ率直な説得力がある。

3. 「学んだこと」の唯一の証は変わること」

一学期末の動乱以来、今は亡き林竹二氏のことばは「学んだこと」の唯一の証は変わること」が、私と生徒たちの合言葉だった。「自分の変化を見きわめよう。どこまで変わるか、やってみよう」

授業を通して生徒は変わりましたか——実践報告をすると、まず

聞かれる。

生徒は必ず変わる。七年の経験で、毎年壁にぶつかり、生徒と対決し、さまざまな模索をしながら、結局は生徒に一度も裏切られたことのない私の自信を持って言える筈だ。けれども、もちろん、その変化は簡単に表われるわけではない。

変化は、まず、生徒の表情に現われる。目が輝きはじめる。うなだれていた顔があがりはじめる。話し合っている時も、話をじっと聞いている時も、表現しようとして考えこんでいる時も、一刻一刻彼らはすばらしい表情をする。私は授業中、それらの表情に見とれることがしばしばある。

二学期以降、ものすごいスピードとエネルギーで文集をつくったが、ふつうなら課題を提出させるのに一苦労なのに、私が尻をたたく必要がほとんどなかった。自ら課題を設定し、自分の意志で動くとき、生徒は驚くほどの力を発揮する。そして、それが一人一人の自信になっていく。

進学希望者の意識が変わり始めた。なんとなく短大に行くのではなく、それぞれに学びたいことを持って進学へのぞんでくれた。

学年末試験は卒業レポートに替えて、「私のことばの学習史」をテーマとしたレポートを課した。「日本語と女」の小論文から約二カ月後、旅立ちにのぞんでこのレポートは、前の小論文以上に感動的な力作ぞろいである。「日本語と女」で受けとめたものが、その場かぎりの高揚でなかったと評価できるのではないか。

ただ、生徒たちが自立しようとすればするほど、就職にせよ、進学にせよ、彼女たちの心を満たす場は少ない。特に女子生徒への求

人職種の狭さに怒りを綴った者もいた。生徒たちの内面にかかわるほど、現在の進路指導のあり方への疑問がつのる。

社会に出れば、自立への壁はますます厚くなるかもしれない。私は種を播くだけなのだ。これから先は、すべて一人一人の力にかかってくる。青春の思いを貫くことは難しいだろう。しかし、高校時代に書きとめた青春の『宣言文』が、彼女たちの勇気の証として、自分を支えていってくれないものか。生徒たちを送りだすとき、私はそういう思いでいっぱいになる。

(長崎県立島原商業高等学校教諭)

自分らしく生きる

——日本語と女——

藤原留美

人間は言葉によって拘束され、一定の型にはめ込まれていく。これと同じように、なぜ、「女だから」という見方をされるのでしょうか。

私は今まで、「これは女には無理だろう」とか「どうせ女は」などの男女差別的な事に対して、別に反感は持っていませんでした。しかし、「日本語と女」の文章中の農家のお嫁さんの話を読んでから、この事に対しての感じ方が少しは変わったような気がします。彼女達が、ものを言っているならぬ、という非人間的な戒めを受け、辛い時など、便所に駆け込んで壁に顔を押し当てて泣いた話は、寿岳さんと同じで、特に印象に残っています。それは、ここまで女が低く見られた事への反感が強かったからだと思います。ある面で、私の理想でもあった昔の女性が、女らしかったと言われる裏には、女(嫁)という事だけで、言いたい事も言えず、じっと我慢し耐えてきた苦しみがあったという事を忘れてはいけないと思います。

最近「どうせ女は……」という見方の言葉を聞いたのは、私が進学することを近所の人に話した時でした。その人は、「どうせ女は、高校卒業後二、三年したら、すぐ結婚するんだから、意味のない大学に行かなくても、高卒で丁度いい」と言われました。私も高校一年までは同じような考えを持っていたし、進路についても、何処か

に就職できればそれでいい、と安易な気持ちだったので、その頃、この言葉を聞いたとしても、何の抵抗もなく聞き逃していたかも知れませんが、二年頃から自分のやりたい仕事が決定的になってきて、そのためには進学しなければ、免許を取る事ができないとわかった今は、何の意味もない大学には行っても行かなくても同じといううなことを言われたのに、とても腹立たしい気持ちになったのを覚えています。これから先、自分らしく生きていくためにも、福沢諭吉訓の「世の中で一番楽しく立派な事は、一生を貫く仕事を持つ事である」という言葉通りの夢を、実現させたいと思います。

言葉というのは、今までの歴史と深い拘り合いがあって、それだけに、したたかな意味や性格を持っているので、自分が何気なく言った言葉で、他人をその言葉通りの人間に作っていく恐れのある、この上なく残酷な道具だということ、そしてまた、日本語のありよう自体が、実に深刻に女の生き方に拘ってくるということが、よくわかりました。私も、型にはまった所があるので、野村きくさんの名言を見習わなければ、と思います。